

## Archive for 3 月 2023

### 「使える英語」とカタカナ英語: リスキリングのリスク(3)

#### 3. 社会的弱者を襲うカタカナ語・ローマ字略語洪水

ところが、現実には、教育におけるオーラル実用英語偏重教育は、その勢いを増すばかりだ。が、いかに笛吹けど、内田も指摘するように、学生らの英語力は落ちるばかりだ。

そこで、私が忖度するに、政官財の有力者らが取るようになった策が、カタカナ語・ローマ字略語での代用。彼らは、自分たちはペラペラ、スラスラ完全マスターしていると自画自賛の英語を、下々のためにカタカナ語やローマ字略語で表現してやることにより、「これくらいならお前らにも分かるだろう」と親切めかして一方的に押し付けてきているのだ。

政官財有力者らのカタカナ語・ローマ字略語多用は、社会的弱者支配のための便利ではあるが、お手軽にして稚拙な道具となっている、と見ざるをえないであろう。

以下、参考までに、ごくごく一部のみを列挙(岸田首相については、上記参照)。

①『[コンサイスカタカナ語辞典](#)』2020。約 58,500 語収録

②『[行政カタカナ用語集](#)』2008。「分かったようで分からない」カタカナ用語 1500 語収録

③厚生省「[カタカナ語使用の適正化について](#)」1997 [列

挙されているカタカナ語とローマ字略語] ニーズ, コンセプト, リスク, プロジェクトチーム, ワーキンググループ, フォローアップ, スキーム, アカウンタビリティ, ビジョン, コーディネート, カンファレンス, フリーアクセス, メディカルチェック, ライフサポートアドバイザー, リターナブル, ホスピタルフィー, ドクターズフィー, モデル事業, ドナー, レシピエント, ケアプラン, ケアマネジメント, ケアマネージャー, スクラップアンドビルド, バイオセーフティー, プライマリ・ケア, バリアフリー, ノーマライゼーション, ホームヘルパー, デイサービス, ショートステイ, ケアハウス, 新ゴールドプラン, サテライト型デイサービス, マニフェスト, プルーデントマン・ルール, ADL, 食品 GLP

④[デジタル庁 HP](#)(2023) [使用されて

いるカタカナ語とローマ字略語の一部] プレスルーム, トピック, マイナンバー, マイナンバーカード, データダッシュボード, サイトポリシー, プライバシーポリシー, ウェブアクセシビリティ, コピーライトポリシー, データダッシュボード, パンデミック, VRS チーム, オープンデータセット, 変換コンバータ, 日英デジタルパートナーシップ, オンラインイベント, SPYxFAMILY, セキュリティ, QR コード, ダウンロードページ, イメージ, チャットポット, カテゴリ, e-Tax, オンラインバンキング, コールセンター, 簡単ステップ, ワンストップサービス, G ビズ ID, ガバメントソリューションサービス, サービスデザイン

これはヒドイ。行政関係用語集ですら、2008 年時点で、「分かったようで分からない」カタカナ用語を 1500 語も収録している。植民地英語より惨めではないか！

日本語は、造語能力に長けた言語だから、たいていの外国語は日本語への移し換えが可能だ。内田も力説するように、そうすることによってこそ、日本語・日本文化は、より豊かになっていくにちがいない。

いまこそ明治の先達に学ぶべき秋だ。

#### 【参照 1】

- 1 内田樹「AI時代の英語教育について」2019、『[サル化する世界](#)』2020 所収
- 2 内田樹「[日本の外国文学が亡びるとき](#)」2008
- 3 内田樹「[イノベーションは、共同体のアーカイブから浮かび上がってくる:複雑化の教育論](#)」,インタビュー2022/05/18
- 4 内田樹, [英文和訳関係ツイート](#), 2016/03/16
- 5 柳父 章『[翻訳語成立事情](#)』岩波新書, 1982
- 6 谷川昌幸「書評:水村美苗『日本語が亡びるとき』」[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) [6](#) [7](#) [8](#)
- 7 谷川昌幸「[愛国者必読: 施光恒『英語化は愚民化』](#)」
- 8 谷川昌幸「[安倍首相の国連演説とカタカナ英語の綾](#)」



#### 【参照 2】(2023/03/15)

杉田聡氏は、「[略語は英語の頭文字語よりローマ字書き日本語で——JPCZ は NKKS に](#)」(論座 2023/03/15)と提唱されているが、ローマ字書き日本語の略語の方が何倍も判りにくいことは明白。

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2023/03/05 at 09:46

カテゴリー: [言語](#), [教育](#), [文化](#)

Tagged with [カタカナ語](#), [ローマ字略語](#), [英語](#), [内田樹](#), [水村美苗](#)

## 「使える英語」とカタカナ英語: リスキリングのリスク(2)

## 2. 知的成熟のための外国語学習:内田樹

この問題につき、真正面から取り組み、ズバリ答えているのが、内田樹「AI時代の英語教育について」(『サル化する世界』2020 所収)。以下、内田の所説に依拠しつつ、外国語学習の在り方について、私なりに要点をまとめてみる。

### (1)自文化成熟のための外国語学習

内田によれば、英語などの外国語を学ぶ本来の目的は、われわれが「母語の枠組み[母語の檻]を抜け出して、未知のもの、新しいものを習得してゆく」ことにより、成熟を実現することにある。

しかし、その一方、決して忘れてならないのが、「本当に創造的なもの、本当に『ここにしかないもの』は、母語のアーカイブから汲み出すしかない」(235)ということ。だから、われわれは「母語を共にする死者たち」からもまた、深く学ばなければならない(237)。

こうすることによって始めて、われわれは、外国語に一方的に飲み込まれてしまうことなく、自分たちの母語の中に本当に新しい語や概念を生みだし、ほかならぬ自分たち自身の文化を発展させていくことが出来るのである。

### (2)「使える英語」教育による英語力低下

ところが、今の日本の政官財界では、実社会ですぐ「役に立ち使える」実用英語の教育が最重視されている。たとえば、

▼文科省「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」平成 15 年 3 月 31 日

目標:高卒=英語で日常的なコミュニケーションができる

大卒=仕事で英語が使える

入試:リスニングテスト

授業:英語による英語授業

この文科省計画にもみられるように、いまや英語学習はもっぱら受験・就職のためであり、また社会に出てからは国内外でのメガコンペティションに勝ち抜くための単なる手段とされている。

こうした状況では、当然ながら学校での英語学習意欲は相対的な競争手段として以上には高まるはずもなく、その結果、「大学に入学してくる学生たちの英語力がどんどん低下してきた」(191)。これは、内田だけでなく、他の大学関係者も少なからず認めている歴然たる事実である。なんたる皮肉か！

### (3)植民地的オーラル・コミュニケーション偏重教育

「使える英語教育」はまた植民地的オーラル偏重でもあり、これによりとりわけ読解力が低下した。

実用英語偏重教育では、英語といっても「オーラルだけが重視されて、読む力、特に複雑なテキストを読む能力はないがしろにされている。これは植民地の言語教育の基本です」(220-21)。

植民地では、「宗主国民の命令を聴いて、それを理解できればそれで十分」。読解力を身につけ、古典などを読み、宗主国民以上の教養を身につけられたら困る(221)。

しかも、オーラル・コミュニケーションの場合には、「100%ネイティブが勝つ」(221)。そんな発音、そんな言い方はしないといって「話し相手の知的劣位性を思い知らせることができる」(221)。

今の日本が、まさにそれ。「今の日本の英語教育がオーラルに偏って、英語の古典、哲学や文学や歴史の書物を読む力を全く求めなくなった理由の一つは、『アメリカという宗主国』の知的アドバンテージを恒久化するためです」(222)。

「文法を教えるな、古典を読ませるな、……。それよりビジネスにすぐ使えるオーラルを教えろ、法律文書や契約文書が読める読解力以上のものは要らない。そう言い立てる。それが植民地言語政策そのものだということ、自分たちの知的劣位性を固定化することだということに気が付いていない」(224)。

これは何とも厳しいが、真っ向から反論できるほどの余地は、どこにもあるまい。ノンネイティブは、オーラルでは、ネイティブ児童にすら負けるのだ。

#### (4)AI 自動翻訳と英語教育

オーラル実用英語を教育目標とすることは、より直接的には、AI 自動翻訳の革命的進歩により現実には無意味となりつつある。

たしかに、自動翻訳の進歩は、私自身、日々驚かされている。今では、主語を省いても、倒置しても、かなりの精度で文意を解釈し、英語はむろんのこと、他の多くの言語にも、瞬時に翻訳してくれる。少し補えば、「実用」としては十分だ。

それでは、と内田は問いかける——「自動翻訳がオーラル・コミュニケーションにおける障害を除去してくれるということになったら、一体何のために外国語を学ぶのか？」(184)。

そして、こう答える——「どんなものであれ、外国語を学ぶことは子どもたちの知的成熟にとって必要である」から、と(184)。

#### (5)創造的なものは母語から

日本には、古来、外来の諸概念を最大限翻訳し取り入れてきた伝統がある。近代欧米の重要な諸概念も、カタカナ語ではなく、「自然」「社会」「個人」「権利」「哲学」などと漢訳して日本語の中に取り入れた。こうして欧米に取り込まれることなく、「日本は短期間に近代化を成し遂げることができた」(227)。

(参照: [柳父章『翻訳語成立事情』](#)岩波新書 1982)

それだけではない。新語、新概念というものは、もともと「個人の思い付きではなくて、母語の深いアーカイブの底から浮かび上がってきたもの」にほかならない(229)。だから、われわれは母語を深く学び、「現代日本語の檻」から抜け出したうえで、「本当に創造的なもの」を「母語のアーカイブから汲み出すしかない」のである(235)。

「母語の檻」から出るには、「一つは外国語を学ぶこと、一つは母語を共にする死者たちへの回路を見つけること」(237)。

以上の内田の英語教育論が、政官財大合唱のオーラル実用英語教育に対する原理的にして効果的な批判となっていることに、もはや疑問の余地はあるまい。



【追補】慶応大学経済学部入試の英語で、日本語本文を読み英語で答える問題が出された。日本語本文は高度で、それが読解できることが大前提。英語以前に日本語能力が試されている。西岡杏誠「慶大、常識覆す『英語試験で出題文が日本語』の衝撃」東洋経済 ONLINE, 2023/02/25

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2023/03/04 at 11:27

カテゴリー: [言語](#), [教育](#), [文化](#)

Tagged with [翻訳語](#), [自動翻訳](#), [英語](#), [入試](#), [内田樹](#), [外国語](#), [柳父章](#), [母語](#)

## 「使える英語」とカタカナ英語: リスキングのリスク(1)

### 1. 岸田首相「リスキング」答弁, 炎上

岸田首相が1月27日の参院本会議で、「この[産休・育休]間にリスキングによって一定のスキルを見つかりたり学位を取ったりする方々を支援する」と答弁した。たちまち、巷では非難ごうごう、大炎上！私も、この答弁をテレビニュースで聞いて、「まさか！」と、ビックリ仰天した。リ(re 繰り返し)キリング(killing 殺すこと)による一定のスキル(skill 技能)の習得を支援するとは、いったい全体どういうことだ。軍事費倍増の前に、殺人の繰り返しよる殺人技能の開発を図るということか!?

まさかと思って新聞でよくよく確かめると、「re」と「killing」の間に、ちっぽけな無声子音「s」が入っていた。たった1字だけ！

しかも、日本人にとって、「リ(re)」と「キル(kill)」は比較的自然に聞き取り発音できるが、その間に「s」が入り「リ s キリング」となると、日本語になじまず、聞き取りも発音も難しい。まったく日本語らしくな

い！日本人の私が、「s」を聞き損ね、「リキリング(繰り返し殺すこと)」と聞き取ったのは、きわめて自然な、当然至極のことなのである。

それでは、岸田首相は、日本国民の代表たる議員の、そのまた代表として、国権の最高機関たる議会において、なぜ主権者たる国民の多くにとって聞き取りづらく、たとえ聞き取っても外来語辞書を引かねば意味がよくわからないような、珍奇なカタカナ英語を使ったのか？ 演説内容以前に、日本国の首相としては、失格ではないか？

不可解に思い、改めて岸田首相の国会演説(2022/10/03)そのものを読んでみた。すると、驚いたことに、耳慣れないカタカナ英語やローマ字略語が、おびただしく使用されていた。たとえば――

インバウンド、イベント、メリット、スキル、リスクリング、サイクル、パッケージ、フリーランス、イノベーション、スタートアップ、GX、DX、エコシステム、グリーン・トランスフォーメーション、ロードマップ、カーボンプライシング、トランジション・ファイナンス、アジア・ゼロエミッション、Digi 田(デジでん)、NFT、Beyond5G……

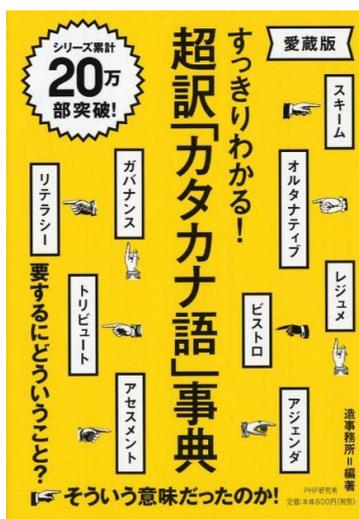
なんと凄まじい演説。とりわけ「Digi 田(デジでん)」には、目が点！ いったいこれは何語で、その意味は何なのか？ 興味と暇のある方は、[内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 HP](#)をご覧ください。

こうしたカタカナ英語やローマ字略語の乱用は、むろん岸田首相に限られたことではない。他の政財官有力者たちも、競ってカタカナ英語やローマ字略語を使用している。一体全体、日本人が日本人を相手にしているにもかかわらず、なぜなのか？

直接聞き質したわけではないが、おそらくそれは、富国強兵には世界共通語たる英語が不可欠だが、下々にはペラペラ英語は今は無理なので当面はカタカナ英語とローマ字略語で下準備をする、といったことを彼らが多かれ少なかれ考えているからに違いない。

彼らは、英語は「世界共通語」だ、だから世界で戦うには「使える」実用英語をマスター(習得)しなければならない、と信じて疑わないらしい。

が、しかし、本当にそうだろうか？ 実用英語やカタカナ英語あるいはローマ字略語の普及で日本経済は再活性化し、社会は発展、文化も高まるであろうか？



■ [超訳「カタカナ語」事典](#), PHP 文庫, 2012

【参照】「リスクリング」の言い直し, 「学び直し」(追加 2023/03/19)

- ・「[産休・育休中のリスクリング\(学び直し\)](#)」毎日新聞, 2023/01/30
- ・「[育休中に学び直し](#)」朝日新聞素粒子, 2023/03/18
- ・「[育休中の「学び直し」を勧めるトンチンカン](#)」Globe, 2023/02/09

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa [編集](#)

2023/03/03 at 14:56

カテゴリー: [言語](#), [政治](#), [教育](#), [文化](#), [歴史](#)

Tagged with [カタカナ](#), [リスクリング](#), [ローマ字](#), [English](#), [英語](#), [学び直し](#), [岸田](#), [日本語](#)